

ふじさん

fujijoho group monthly magazine

～ 2024年指針 ～

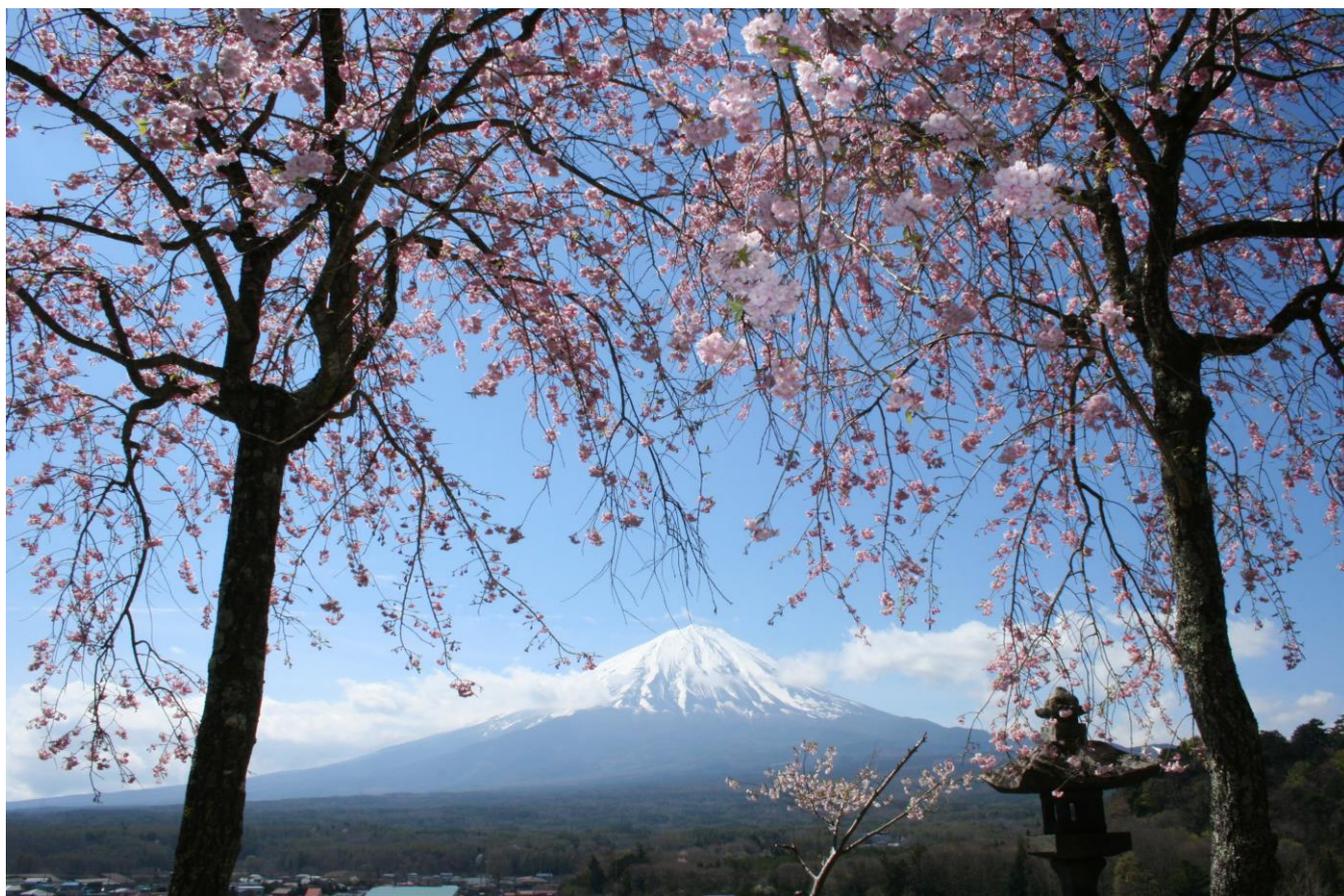
適者進取

富士情報

[今月のひとこと]

ゴジラ-1.0

- ・健康経営優良法人2024（中小規模法人部門）に認定されました
- ・コンビニ50年



通玄寺の桜と富士山

写真提供：鳴沢村 企画課



今月のひとこと

ゴジラ-1.0

社長 渡辺直企

第96回アカデミー賞(2024)の授賞式が3月10日(現地時間)、米ロサンゼルスドルビーシアターで行われ、山崎貴監督作「ゴジラ-1.0」が邦画として初めて視覚効果(VFX)賞を受賞しました。監督として視覚効果賞を受賞したのは「2001年宇宙の旅」のスタンリー・キューブリックのみで、山崎監督は55年ぶり、史上2人目の受賞監督となりました。アカデミー賞では1月13日にベイクオフを実施し、ノミネート作品を10本の候補の中から5本に選定します。ベイクオフでは各作品のプレゼンテーションとショートクリップの上映が行われます。山崎監督のプレゼンテーションでは、「限られた予算の中で原始的な方法、人力でいろいろなことをやって、VFXの力で本物にみせるという昔ながらの方法と最新の技術を組み合わせることで出来た。」とアピールし、「会場の重鎮たちは原始的な現場での撮影と、VFXを組み合わせでどういう風にやっていくかと一生懸命工夫してきた。今はCGでほとんど出来るようになってきてしまっていて、すごく懐かしく感じたのだと思う。チャーミングな発表だと言ってもらった。少ない人数で手作業でクラフトマンシップ、それが新鮮だったのだと思う。」と振り返っていました。米業界紙のVarietyの記事でもベイクオフに関して、低予算(1500万ドル以下)、少人数(35人)で如何にクリエイティブな問題に対して挑戦し課題解決したかというチャーミングなプレゼンテーションだったと評していました。2021年に西武園ゆうえんちに設置されたゴジラ・ザ・ライドに山崎監督が携わっていて、ゴジラ・ザ・ライドで実現した近さ、恐怖が大きなヒントとなり体感型映画を目指したと言っています。「ゴジラ-1.0」のメイキング映像でも手法をいくつか紹介しています。波に揺れる船の撮影は通常はカメラを固定して船のセットを油圧シリンダーで動かします。本作品の場合はセットは動かさず、カメラを円を描くように動かし、俳優がカメラに合わせて動いて撮影しています。この様に古典的な特撮の技術を多用し、VFXでゴジラを効果的に表現することが出来たそうです。

山崎監督はトークショーでこの作品の予算はハリウッド作品の1/10か1/20位と言っていました。アカデミーの視覚効果賞にノミネートされた他の作品の予算は「The creator」が8000万ドル、「Guardians of the Galaxy」が2億5千万ドル、「Mission:Impossible」が2億9千万ドル、「Napoleon」が1.3~2億ドルと非常に多くのコストを掛けていることが分かります。

今のハリウッド作品はパイプラインと言って一つのカットの作業を細分化して多くの人が担当し同時並行的に作業します。作品のチェックも多くの人がチェックして仕上げます。対して、本作品は一つのフロアに全スタッフを集め一人が一つのカットを担当し、山崎監督が直接チェックしていて非常に効率的に作業が出来ます。また、ハリウッドの場合一つのカットに対して視点を変えたりして多くのバージョンのCGを作って良いものだけ採用するので半分以上は使われないといった非効率性もあるようです。

渋谷紀世子VFXディレクターは山崎監督作品に携わってきました。2007年公開の「ALWAYS続・三丁目の夕日」の序盤でCGでゴジラを登場させたときは大変だったが、マシンのスペックがようやく追いついてきたと言っています。コンピューターで画像処理するとき使用するGPUはムーアの法則に則り年々性能が指数的に向上しています。epochai.orgによるとドルあたりの処理速度は2.46年で2倍となり、これは8.17年で10倍のコストパフォーマンスになります。処理速度が低いときには一人で出来る作業が少ないので多くの人が作業分担するのは理にかなっていません。ハリウッドでは作業手順と予算は変えずに余力をカットの大量生産、精査に費やしているのだと考えられます。本作品ではマシンスペックが追いついたので少数精鋭、かつVFXを手掛けてきた山崎監督の手法とマッチし、良い作品に仕上がったのだと思います。我々を取り巻く技術は日々進化しています。常に今の立ち位置を意識しながら少しずつでも変えていく必要があると考えています。

「健康経営優良法人 2024（中小規模法人部門）」に認定されました

経済産業省では、健康長寿社会の実現に向けた取り組みの一つとして、従業員等の健康管理を経営的な視点で考え、健康の保持・増進につながる取り組みを戦略的に実践する「健康経営」を推進しています。



健康経営優良法人認定制度とは、特に優良な健康経営を実践している大企業や中小企業等の法人を「見える化」することで、従業員や求職者、関係企業や金融機関などから評価を受けることができる環境を整備することを目的に、2016年度に経済産業省が創設した制度です。

健康・医療新産業協議会健康投資ワーキンググループ（日本健康会議健康経営・健康宣言10万社WG合同開催）において定められた評価基準に基づき、日本健康会議が「健康経営優良法人」を認定します。

3月11日に「健康経営優良法人2024」として、「大規模法人部門」に2,988社、「中小規模法人部門」に16,733社が認定されました。認定数は昨年に比べ、「大規模法人部門」で300社余り、「中小規模法人部門」で2,700社余りと大幅に増加しています。当社は6年連続の認定となり、引き続き実効性のある施策を講じていきますので、社員のみなさまのご協力をお願いします。

今月の表紙

～ 通玄寺の桜と富士山 ～

標高が高い河口湖周辺では東京と比べると平均気温が5℃ほど低いいため桜は4月中旬から咲き始め場所によってはゴールデンウィークまで楽しむことができます。今年は桜の開花が例年より早いかもしれませんが、道の駅なるさわや通玄寺からは満開の桜と雄大な富士山を眺めることができます。

コンビニ 50年



1974(昭和49)年5月、日本初のコンビニエンスストア（コンビニ）が江東区豊洲

に誕生しました。オーナーは当地で酒屋を営んでいた方で、イトーヨーカ堂が加盟店を募るフランチャイズ（FC）方式のコンビニ経営に手を挙げました。これがセブン-イレブンの1号店です。

セブン-イレブン開業のきっかけはイトーヨーカ堂の鈴木敏文取締役（現セブン&アイ・ホールディングス名誉顧問）がアメリカ視察中に当時全米で4,000店を展開するセブン-イレブンに出会い、そのノウハウを吸収するために提携を申し込んだことにあります。以降、全国でコンビニは多数開業しましたが、次第にセブン-イレブン、ローソン、ファミリーマートといった大手と地方で独特の経営をするコンビニ（北海道のセイコーマートなど）に集約されつつあります。

国内の店舗数は6万店弱で頭打ちですが、2022年のコンビニの国内売上高は11兆1,775億円で、食品スーパー（約12兆円）に迫り、ドラッグストア（約8兆円）より大きい規模です（ちなみに損保は約7兆円）。国内市場が頭打ちということもあり、セブン-イレブンやローソンはアジア・オセアニア地域での店舗展開に力を入れています。10年ほど前になりますが、タイを訪問した際にバンコクの市内にかなり頻りにセブン-イレブンが開店していて現地の皆さんが当たり前で買い物を楽しんでいるので驚きました。タイには昨年6月末で1万4,000店以上のセブン-イレブンが開業しておりすでに1強状態で、さらに毎年700店程度が新たに開業する予定とのことです。

今年の5月でセブン-イレブン1号店は開業50年となります。長年の経営努力の積み重ねで都会から地方まで日本人の生活に欠かせない社会インフラとなったコンビニですが、これからも自動車を持たない高齢者向けの移動販売、離島へのドローン配送などさらなる進化を期待したいと考えます。